資料2　令和5年度　自己評価書　作成日：令和6年1月20日　国分寺市立第二中学校　校長名　岡本　祐治

教育目標：	○健康で　たくましく生きる　○みずから学び　創造する　○心豊かに互いを尊重する
めざす学校像： めざす生徒像： めざす教師像：	○学ぶ喜びが実感できる学校　○ふれあう喜びに満ちた学校　○夢を育む学校　（校訓）　師弟同行、夢 超スマート社会　Society5.0に向けて、世界の人々の幸福を願い、主体性を持って生きる人 授業実践を通して授業力を高め合える教師、適切な指導ができる教師、組織の一員として協力して職務を遂行できる教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標（中間）	努力指標（最終）	成果指標（中間）	成果指標（最終）	分析コメント	改善策
確かな学力の伸長	ICTを活用した令和型教育により、学ぶ楽しさ、わかる喜び、学び続けようという意欲を育む授業を工夫し、確かな学力の伸長を図る	●基礎的・基本的な知識及び技能の習得	1人1台のタブレットの活用やICTを活用し、個別最適化された学びを充実することで、誰もが「わかる」「できる」授業を実現する。	1 84.6%	2 86.2%	4 85.5%	4 86.8%	(アナログ)＋(デジタル)の授業から(アナログ)×(デジタル)な授業への改善をすすめるため、ICT推進委員会による研修はすすめることができた。しかし1人1台のタブレットの効果的な活用については今後も研修の必要がある。生徒は授業は「わかる」と多くの生徒が肯定的な回答をしている。これはタブレットの活用だけでなく、今年度校内研究のテーマとしているジグソー法の視点による授業改善も効果として出はじめていると考えている。	個別最適化された学びをすすめるための1人1台のタブレットの効果的な活用の研究は今後もすすめていく必要がある。そのためにICT推進委員会には効果的な活用方法の情報収集と校内での情報共有をさらにすすめていく必要がある。また学校全体として、どの授業もタブレットが使用できる状態で受けるということを基本としたり、改めてPCに関する校内ルールの明確化等すすめていく必要がある。
		●自己決定の場を提供し自己指導能力を育成する	自らの意見を述べる、自己の仮説を検証するなど、自ら考え、選択し、決定、発表する等の場面を設ける。	3 88.4%	4 93.1%	4 82.4%	4 86.9%	自己決定の場を授業の中で設けている教員は93．1%となった。この上昇が「自分で考えたり、選んだり活動に主体的に参加している生徒が86．9%と7月時点より4．5ポイント上がることにつながったと考えている。各学年ともにポイントが上がったが1年生は6．5ポイントと最も上昇した。	自己決定の場の提供が「自分で考えたり、選んだり活動に主体的に参加」することにつながるので、自己決定の場の提供を今後も工夫していく。またそれぞれの教科の取り組みを全体で共有し、学校全体として、主体的に学ばせる授業方法を浸透させていくことが必要がある。
豊かな心の育成	人と人とのふれあいを通し、自己肯定感を高め、心豊かに自信をもって生きていく力を育む	●生徒の自己肯定感を高め、不登校やいじめ等の課題の解決につなげる	一人一人の良さを見つけ、褒め、認め、励まし、伸ばす指導を推進する。	4 100%	4 96.4%	2 72.9%	2 73.9%	全国学力・学習状況調査の結果では、「自分には、よいところがあると思う」について肯定的な回答が、全国、東京都ともに約80%となっている。二中では、7月時点では72．9%、12月時点では73．9%と若干の上昇はあったがまだまだ全国調査との開きはある。	生徒とのコミュニケーションをとる時間、会話をする時間を確保し、意識的に良い部分を探そうとする意識改革も必要。週1度の生活指導部会での情報共有だけでなく、朝の打ち合わせにおいて、リアルタイムの生徒情報を職員室内で積極的に共有し、学年や学級を越えて生徒を見守る意識を高めていく。
		●共感的な人間関係の育成と安全・安心な風土の醸成	発表等において、失敗を恐れない、間違いやできないことが笑われない、生徒同士がお互いに関心を抱き合う集団づくりを図る。	4 100%	4 100%	4 85.2%	4 86.1%	教員は、共感的な人間関係の育成と安全・安心な風土の醸成について意識をしている。生徒の肯定的な回答は7月時点の85．2%から12月時点86．1%と若干ポイントが上がっている。しかし学年別に見ると1年生は2．7ポイント下がった。今後も意識を高めて共感的な人間関係の育成と安全・安心な風土の醸成をしていく必要がある。	今年度の校内研修のテーマでもある協働学習は、お互いへの関心を高めあうことにもつながるので、研修を活かした授業をすすめる。 教職員集団は普段から多様な価値観を認め、生活指導の際には、単に問題行動の改善を指摘するのではなく、その生徒個人の良い部分を伸ばす意識を高める必要がある。学校という場で、意図的に関わり合いの場面をつくり、また適切に指導していく必要がある。
夢を育む	将来に対する夢と希望をもちよりよい人生を送ろうとする力を育む	●日頃の生活の中で、夢につながる目標をもち挑戦する姿勢を高める	キャリア教育をはじめ様々な活動を通して、将来設計能力や意思決定能力を高める。	4 96.1%	4 93.1%	3 68.2%	4 70.0%	「将来の夢や目標をもっている」への肯定的な回答は、全国学力・学習状況調査の全国平均では66．3%となっている。二中では7月時点の成果指標が68．2%、12月時点70．0%と若干ポイントが上がった。	残念ながら数値としては表れていないが、4年ぶりに実施した職場体験は非常にプラスに働いている。2年生の将来に向けて考える大きなきっかけとなっている。今年度の反省を行い、来年度につなげていく。また生徒がポジティブに将来の見通しをもつために、小さなことでも生徒が「できた。」と感じるような積み重ねを行っていく。
特色ある教育活動の推進	特色ある教育活動を推進し、地域から信頼される学校を創造する	●特別支援学級との交流及び共同学習の推進	授業、特別活動、行事において交流及び共同学習を工夫し積極的にすすめるとともに、生徒には交流や共同学習の意義を示していく。	4 100%	4 93.1%	2 72.1%	2 70.5%	交流や共同学習に協力して取り組めた生徒が、70．5%と若干ポイントが下がった。交流や共同学習は実際には行われているが、それを意識させることができていないと考えられる。	生徒たちに交流の意義について示すことがあまりできていないので様々な機会を通じて伝えていく必要がある。特別支援学級の生徒側がどのように交流級の生徒と関わるのかを学ばせ、交流級の生徒側もどのように接するべきなのかを学ぶ必要がある。 生徒同士が交流できる機会を図ることを、教員が意識する必要がある。例えば、通常級の若手教員は、特別支援教育理解の一環としてF組で道徳を行ったり、宿泊学習などの行事に参加したりするなど、まずは教員の交流を図ることができるのではないか。一方、支援級の教員も、学級だよりの共有や学級の紹介を積極的に行い、情報発信をすることで、存在感を高めていく必要があると考える。
		●小中連携を活かした国分寺学の創出。	これまでの取組を見直すとともに小中連携を通して創出する。	1 53.8%	1 44.8%	2 41.0%	2 40.0%	国分寺学推進委員による小学校との連携を活かした準備はすすんでいるが、他の教員については意識が低い面がある。来年度に向け推進委員を中心に計画を全教員で確認していく必要がある。生徒の地域についての意識については、1年生の国分寺調査や2年生の職場体験を行ったが、地域への関心に直接的に結びついていないところもある。	今年度小中連携の新たな試みも行った。この中には国分寺学につながるものもあり、来年度に向け確認をしていく必要がある。来年度の国分寺学本格実施に向けて国分寺学についての理解を教員間でさらに広めていく必要がある。また生徒の地域への関心を高めるために、地域の取組のボランティアの紹介など今年度行ったことも継続していくことが必要である。